
伝文

日本口承文芸学会 会報

第58号 2016年2月 発行

日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學文学部 花部英雄研究室

Tel: 03-5466-0224 (研究室)

Fax: 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail: info@ko-sho.org

身の伝承

大島 建彦

私のすまいから十分ほど歩くと、青山御所の北側の御門に近く、南元町の公園の片隅に、「鮫ヶ橋せきとめ神」というものがまつられている。文化十一年刊行の『江戸神仏願懸重宝記』には、「日本橋の欄檻（百日咳の願）」という項で、この四谷の鮫ヶ橋についてもふれられており、頭痛や百日咳の願かけがおこなわれたことが示されていた。明治三十六年刊行の『新編東京名所図会』第三十九編にも、この「鮫河橋」の名があげられており、

水門の欄楯には、木戸といはず、垣といはず、四辺の杉の梢にまで、何者の所為にや、白紙を結付、之を封ずるに紅白の水引を用ゐたり。曰く防咳<せき>の呪符<おまじなひ>なりと
としるされている。

かねて、この神に心ひかれていたが、今から二十年ほど前に、町内の古老の方に、そのいわれについてうかがってみた。それによると、江戸時代から明治年間を通じて、鮫ヶ橋の堰のほとりでは、咳とめの願をかけることがおこなわれていたが、明治末年から大正初年にかけて、そこに小さな祠がもうけられており、しだいに咳の神として拝まれるようになったという。さらに、昭和五年六月には、南町在住の信者の老女によって、咳とめの大願成就のために、この鮫ヶ橋の堰の跡地に、「鮫ヶ橋せきとめ神」という石碑がたてられたのである。戦後の昭和二十年代には、かなり荒れはてていたというが、昭和四十二年五月にいたって、南元町や若葉などの有志によって、新しい「鮫ヶ橋せきとめ神」の祠がもうけられており、「せきとめ稲荷」という名でもよばれるようになった。さらに、昭和四十六年十月には、都道の五十八号線の拡張にともなって、この「鮫ヶ橋せきとめ神」の祠も、改めて南元町公園の一画にうつされることとなり、今日にいたるまで、地元の有志によってまつられているというものであった。

そのこまかないきさつについては、『西郊民俗』の百四十五号に、「鮫ヶ橋せきとめ神」と題して書きとめておいたが、ごく身近なところの祠でも、これだけの変遷を遂げていたことに、改めて心ひかれたのである。ともすれば、日本の口承交藝というのも、すっかりすたれてしまったときめつけられがちであるが、とりあえずは、それぞれの身のまわりのことから、すこしずつ気をつけてみてもよいのではなかろうか。

(東京都)



第69回日本口承文芸学会 例会報告（企画側から）

今井 秀和

去る2015年12月5日（土）、國學院大学渋谷校舎において、第69回・日本口承文芸学会例会が開催された。今回の例会は、「〈怪異〉の聞き方・書き取り方—〈口承〉研究の視点から—」と題して、ゲスト1名（一柳廣孝）、会員2名（大島廣志、今井秀和）によるシンポジウム形式で行われた。全体の構想としては、「江戸から近代、そして現代にかけて、日本人は怪談をいかに聞き集め、いかに記録してきたのであろうか。その営みに対する口承文芸からの再検討を試みたい」という前提のもとに、上記3名がそれぞれ近世・近代・現代を中心とした口頭発表を行った。

最初の報告者である今井は、「江戸期の転生騒動にみる〈怪異〉の聞き方・書き取り方の諸相」と題して、当時、肯定・否定が入り乱れていた転生騒動に関する考察を行った。具体的には、武蔵国の少年「勝五郎」の転生譚をめぐる江戸の知識人たちの反応や、周囲との交流を通しての、勝五郎自身の語りに向かう姿勢の変化を対象に据え、〈怪異〉の聞き方や語り方、書き取り方（記録の仕方）の諸相が示す意味について迫った。

続く一柳の「怪談を連載する—明治後期の新聞記事を中心に」は、明治30年代後半から、新聞各紙が怪談の連載を始めたという事実に着目。専門である日本近代文学における怪異の問題を踏まえた上で、文明開化というテーゼの下、「迷信」として排除されてきた「怪談」が脚光を浴びるようになった、時代の変化の背景に関する考察を展開した。そして、新たな言説の場としての新聞メディアが、在地伝承の紹介だけでなく、実話性を強く打ち出した怪談をも発信していたこと、また、情報の発信および収集という機能を持ち併せた新聞メディアが、当時の怪談文化に対して果たした役割などを浮き彫りにした。

最後の報告者である大島の「学校の怪談と都市伝説」は、近代の記録にはじまり現代に至るまでのロングスパンでの「学校の怪談」の展開と変遷を論じた。そして、その過程に、師範学校や寄宿舎を含む学校システムの通時的变化や、1990年代の「学校の怪談」ブームとメディアとの関わり、さらには、研究者によるアンケート、高校・大学の怪談記録、都市伝説とインターネットなど、情報の収集・発信に関する様々な因子が絡んでいることを明らかにした。

各報告の順番は時代の流れを意識したものだったが、図らずも全ての報告者が、前後の時代区分を

も射程に含めた考察を行う結果となった。飯倉義之を司会に迎えた共同討議では、各時代の〈怪異〉へのまなざしが持つ特徴や、メディアと〈怪異〉との関係などに関して、報告者間における質疑が為された。さらに、フロアを巻き込んだ質疑応答においては、ベテランから若手に至るまで、積極的な意見交換が展開された。当日の様子については別途、永島大輝会員による原稿が用意される予定なので、そちらをご覧ください。(東京都)

第69回日本口承文芸学会 例会報告(聴衆側から)

永島 大輝

二〇一五年一月五日、國學院大學において例会「〈怪異〉の聞き方・書き取り方—(口承)研究の視点から—」が行われた。

大まかに近世、近代、現代という区分がなされ三人の発表があった。その後討論会があり、質疑応答では、多様な見地から意見があった。

今井秀和氏「江戸期の転生騒動にみる〈怪異〉の聞き方・書き取り方の諸相」江戸期には仏教の唱導なども含め、転生の話は多数ある。今発表では、前世の記憶を持つ少年勝五郎がある時期から、生まれ変わりについて語ることを避けるようになったことや、面会拒絶の者がいたことなどに焦点をあて考察した。当初勝五郎は家族に話をし、祖母とともに前世とされる藤蔵の生家を訪ねて話をし、しかし、騒ぎが大きくなり、かかわりはじめた江戸の知識人には語りたがらないという変化が指摘された。また、知識人によってもその記録に向かう姿勢には差異があったことにも言及された。討論会では勝五郎自身の年齢や性格などの個性についての視座からの質問がなされた。

一柳廣考氏「怪談を連載する—明治後期の新聞記事を中心に」通説で明治期には神経や脳のトラブルである怪異は撲滅したとされるが、明治三十年後半に様々な新聞が怪談を掲載するようになる。このうち連載記事を取り上げ、「伝承として土地に伝わる怪談」、「実話性を強調、事実を担保したもの」、「ルポタージュ」、「紙上で「怪談会」を再現したもの」、「個人や新聞紙上などにおける怪談情報収集」などの分類をし、考察を行った。特に時代が下ってから顕著になる「実話性の強調」は、現代の「実話系怪談」につながるような、怖がらせるためのテクニック意識も既にみることができると指摘。さらに新聞の影響は雑誌にも及んでいくことにも言及された。討論会では、こうした怪談の新聞連載は西日本に顕著であることが指摘され、議論された。

大島廣志氏「学校の怪談と都市伝説」明治大正時代の学校の怪談は民俗社会の怪異との差はほとんど見られない。ところが昭和一年頃からは学校ならではの新たな怪異との混在化が進むことが指摘された。また、明治十九年の全寮制の師範学校の寄宿舎が怪談と深くかかわるとし、「試肝会」と呼ばれた肝試しの会などで、学校の怪談が語られていたことが資料としてあげられた。その後、学校の怪談ブームが起り、多くの話が集められたが、授業時のコメントペーパーや、ラジオ投稿、読者からの葉書など広義のアンケートによって集められることが多く、その際の回答者の多くは若者であったことに言及。こうした怪談はインターネットの世界などで再生産されているという。さらに現代においてはゴーストツアーなどかつて「忌避すべき迷信」とされた怪異が土地固有の文化として見直されることもある。

質疑応答では、フロアより多分野の意見や、世間話の研究や学校の怪談研究の黎明の話がなされ議論が大きく盛り上がった。(栃木県)

各地の語り・語り手・語りの場の紹介（第2回）

◆聴き耳の会

野村 敬子（東京都）

融通無碍。本会の特徴は考え方や行動が何物にも束縛されず、自由自在であることに尽きる。そして会は流動的な表情を持つ。「来るものは拒まず去る者は追わず」と会員の誰かが言う如くである。

成立5年。常時月例会は30人前後の参加者があり、語りの会、イベント、講演会、ボランティアなどの情報交換。情報への反応は鋭く積極的な参加がみられる。当初、野村自宅で中野ミツさんの昔話を数人で聴いていたが、次第に聴き手が数を増して「聴き耳の会」結成に至った。

会の協力はライブ形式『江戸川で聴いた中野ミツさんの昔語りー現代昔話継承の試み』出版となった。この本は皆の聴き耳と語り手ミツさんの心的関係性を内包した。以来例会の度にミツさんは語り手として皆の聴き耳の養いに力を尽くして居られる。また故郷・越後三条市に皆と探訪旅行し伝承風土を案内された。

会員は首都圏で語り活動をする人、語りを研究する人、再話、創作活動を志す人、昔話を聴くのが好きな人等多様である。例会の折には近所の区立小学校に設けられた学童保育に語りボランティアとして出向く。魂の苗床としての語りを響きあう共有空間に保有し、東日本大震災の被災者語りボランティアのため栃木県に通っている。被災者の心の問題として、栃木での経験から「語り行為・言語行動の重要性を社会通念にすること」を提唱（『間中一代さんの栃木語り』）。

これまで口承文芸研究の地平を拓く努力は兎角研究者独占の観があった。語り、歌う実践者には副次的処遇があったことは否めない。また伝承を重んじ現代の語り手は区分けされて、書承の語り手への一段低いまなざしには注意すべきものがあつた。論者と実践者は手を携えて研究し、思想感覚の発露について各自の立場を照射しあうことこそ大切なのではないだろうか。この意味から当会は日本昔話学会に「中野ミツさんの語りの部屋」を提供し、日本口承文芸学会研究例会には共催を申し出た。



◆あどがたりの会

米屋 陽一（千葉県）

1988（昭和63）年、渋谷勲を講師に迎えて、保育者向けの民話の講習会が開かれた。その後、「あどがたりの会」が発足。毎月1回の例会は、当初は民話の勉強会、後に語りの勉強会に移行していった。主な活動場所は東京・高田馬場。現在の会員は9名。保育経験者（女性）が多く、歌・手遊び・語りなど、長年の経験が活動の現場に生かされている。

「自分の言葉で語る」（渋谷・提唱）ことを発展的に継承し現在に至る。会員には、秋田・岩手・山形・福島・茨城・東京・福井・熊本などの出身者がおり、地域語（方言）・地域の伝承・母語を生かした新しい語りを試みている。

東京生まれの益子芳江は、下町や築地界隈の言葉を探し、語りに生かそうと試みている。また、日本民話



福島県いわき市・東松院での語りの会

の会・語りの会、伝承の語り手、新しい語り手から学ぼうと、さまざまな機会を得て、交流を積み重ねている。最近では拡大例会（講座）を設定し、口承文芸学・民俗学専門の講師を招き、基礎的な学習も続けている。現在、「例会」「拡大例会」「語りの会」の活動のほか、老人施設・デイケアサービス・保育園・児童館・小学校・公民館などを訪問し、社会とのつながりを持たせながら活動を展開させている。東日本大震災以降、被災地訪問を繰り返し、保育園・仮設住宅の集会所などで語り・交流を深めている。また、敗戦後70年を意識して、長崎の大学病院で働いていた母親の被爆体験を、土井一美は熊本・天草地方の言葉で語り始めている。近々、『あどがたりの会の語り』（仮題）の刊行が予定されている。



中川花子（77歳）の語り

◆ ふるさと北上民話研究会（会長・菌牧枝/副会長・加藤ゆりいか・千田直）

米屋 陽一（千葉県）

2000（平成12）年11月、東京・霞ヶ関の「北上市東京事務所」にて発足（後に京橋区民館）、第1回定例会（毎月第一木曜日）が開催された。当初は岩手県北上市の出身者で構成。主な活動は、「物産展での語りと販売応援」「ふるさと北上市での語り」「ふるさと関連の語り」「ボランティアの語り」「語りの出前」などがある。2010（平成22）年9月、10周年記念として『ふるさと北上の昔話』（加藤ゆりいか編）が刊行された。2015（平成27）年11月23日、東京・北区「北とぴあ スカイホール」にて、「初自主口演」の「15年祭 えなだりの昔ばなし」が催された。北上市長も掛けつけ、北上出身者、民話・語り愛好者が集い、100名を超える大賑わいとなった。曾祖母から聴いた「山々の屁っぴり爺んご」（横井凜美子）、祖母から聴いた「狐の化け比べ」（高橋幸子）など、14名の語り手の昔語り。「むがす、あつたつたど」「むがーし、あつたどすう」と語り始め、「どんどはれ」と語り納めた。全員昔語りの世界に浸った。前掲の書に「子どもの頃の言葉が冷凍保存されるが如く体の中に残っています。都会に出てきてから長い間、体の奥の奥に押し込んできたふるさとの言葉呼び起こしながら、ふるさとの言葉で昔語りをしています」と、加藤は記している。昔語りの原点はここにあり。母語・地域語・伝承を生かした北上の新しい形の昔語りの世界は、大都会のど真ん中で輝きながら全国に発信したのであった。



ふるさと北上民話研究会・15年祭

「ふるさと北上民話研究会会報」2016年1月・85号発行（小原純一）

「各地の語り・語り手・語りの場の紹介」は4回にわたってお届けしていく予定です。会員のみなさまからの情報をお待ちしております。会報委員会（達）まで。

事務局便り

○寄贈書籍（2015年8月～2016年1月受け入れ）

- ・日本民俗学会『日本民俗学』第282号・283号・284号 2015年5月・8月・11月
- ・日本民話の会『聴く 語る 創る 24 戦後70年 戦争の時代を語りつぐ』2015年9月
- ・大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』勉誠出版、2015年5月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第48巻5号～9号 2015年8月～12月
- ・上野学園大学日本音楽史研究所『唐代音楽の研究と再現 資料集』2014年3月
- ・北海道博物館編『夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』2015年9月
- ・赤羽正春・齋藤君子・星野紘編『神々と精霊の国 西シベリアの民俗と芸能』国書刊行会
2015年12月
- ・『国立歴史民俗博物館研究報告』196集 2015年12月

○日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學文学部 花部英雄研究室

Tel: 03-5466-0224 (研究室) Fax: 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP (<http://ko-sho.org>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。